

日本人会の 社会貢献 活動

◎特集

Wat Arun
Community
Learning
Center

ワットアルン(暁の寺)
コミュニティ・
ラーニング・センター

今年初めての支援先

「夢は看護師」……皆様にご協力いただきましたチャリティーバザーの純益金を原資に、看護助手を目指して学ぶ奨学生に1年間の学費を寄付しました。



看護助手を目指す奨学生に 学費等10万パーツを寄付

ワットアルン・コミュニティ・ラーニング・センター (Wat Arun Community Learning Center) は、貧困家庭の子どもたちに教育の機会を与えている地域に根ざした仏教系の団体です。タイの教育省から認可を受け、ノンフオーマル教育をワットアルン敷地内のセンターで行っています。

また、人身取引被害者予備軍とも言われる貧困層の少女たちを寄宿生として受け入れ、看護学校で学ぶために1年間の奨学金を付与し、卒業後は看護助手として病院や企業で働くことができるよう雇用に繋げています。日本人会から、ワットアルン・コミュニティ・ラーニング・センターの看護学校奨学生1名に、1年間の学費等10万パーツを寄付することを決定しました。

去る3月21日(木)、同センターで授与式が行われ、その折りに代表のハルタント・グナワンさんとアシスタント・ディレクターのマユリー・コージラパンさんにお話を伺いました。

「ワットアルン・コミュニティ・ラーニング・センターの設立と活動内容についてお聞かせください。」

私たちのセンターは2006年に設立しました。恵まれない子どもたちを人身取引や暴力・麻薬などの危険から守るための支援が活動内容です。貧困家庭のコミュニティの子どもたちを対象に、英語やコンピューター、タイ舞踊などのクラスを無

償で開講しています。また、毎日午後4時半から、誰でも参加できる瞑想を行っています。ストレスや怒りは、暴力や自殺、麻薬の引き金となるので、瞑想によってコントロールできるようにサポートしています。

また、活動の柱の一つとして、看護を学ぶ無償の奨学制度があります。対象者は人身取引のリスクが高い貧しい家庭の少女たちで、タイ各地から来ています。



① 3月21日に行われた奨学金授与式、前列右から3人目が奨学生のナムさん
② 日本人会チャリティーバザー基金と奨学金の趣旨を熊本事務局長が説明
③ 前日にバンコクに来たばかりの奨学生たち。やや緊張の面持ち

教育を与え専門性のある 仕事に就くことで 人身取引被害を防ぐ

「1年通学し看護助手になる奨学制度は、人身取引被害予防の実効性ある取り組みとして注目されているそうですね。今年初めて、日本人会が奨学金の支援をさせていただきます。」

ありがとうございます。今年皆さんの支援のおかげで14期生16名を迎えることができました。そのうちの1人が日本人会の奨学金で学ぶ機会を得たのです。大変喜ばしいことです。

日本人会の奨学金をいただいたナムは18歳。北部ターク県のミヤンマー国境付近の村の生まれで両親は貧しい農民です。姉と弟は学業を続けることができませんでした。ナムも高校をやって家計を助けるように父親から言われたのですが、学校を続けたかった彼女は休日に働いて学費を稼ぎ、なんとか高校を卒業しました。しかし、その後はもう学業を続ける道はない。そんなときに私たちのプロジェクトの情報を得たのです。

孤児、家庭崩壊、貧困など厳しい環境下にある子どもたち、

[右] ハルトアント・グナワン氏●ワットアルン・コミュニティー・ラーニング・センター代表。生国インドネシアで複数の事業を成功させていたが、出家のため来タイ。2006年同センター設立。実兄は大阪の病院の医長を務める。

[中] マユリー・コージラパン氏●センター設立の年にハルトアント氏から英語を学び、大学卒業後スタッフに。同センターのアシスタント・ディレクター。母親は日本人。

[左] ナパボン・プライリアントーン(ナム)氏●日本人会が支援する奨学生。ターク県出身。学校の休日に学費を稼ぎながら高校を卒業。看護助手になった後、4年制の看護大学に進みたいと語る。



ことに少女は人身取引の被害に遭うリスクが非常に高い。そこで私たちは、教育を与え専門性のある仕事に就かせることによって、リスクから守ろうと考えました。

具体的には、私たちの寮から看護学校に1年通い、修了後は看護助手として病院に就職します。給与をもらうようになると、彼女たちのほとんどが家族に仕送りをします。そのお金で弟や妹が学校に通い、さらには実家の家を建てた卒業生もいます。子どもを働かせて現金を得ようとしていた親も、そういう話を伝え聞くことによって子どもをプロジェクトに参加させたいと考えるようになりました。

一人の少女が教育のチャンスを得てしかるべき職に就くことによってリスクを回避し、周囲も変わっていくのですね。これまで何人が卒業したのですか。

今年までに合計227人を受け入れ、第1期から昨年度の第13期までの卒業生は211人です。3年間看護助手として働いた後、希望者には、審査の上4年制の看護大学に進学して正看護師になる道が開かれており、これまで11人が看護大学に進学

し、2人が卒業しています。— JICAのレポートによると人身取引は2000万の被害が報告されています。

現実には報告されている数よりもっと多くの少女や子どもたちが犠牲になり、身体的精神的虐待に苦しんでいます。麻薬や性被害にさらされる子どもも少なくはない。だからこそ予防が大切なのです。

小さな助けでも大きな意味がある

—ところで、インドネシア人であるハルトアントさんは、どのようなきっかけでタイに？

タイに来たのは僧侶になるためでした。20年以上前のことです。それまで私はインドネシアで幅広くビジネスを展開しており、CEOとして成功していました。でも少しも幸せではなかった。感情の起伏が激しく、絶えず不機嫌で、母に対してさえ怒鳴ることがあったのです。お金はたくさん稼いでいたけれど、ストレスフルで血圧が200以上あり、頭痛と不眠に悩まされてもいました。そんな私に母がタイで僧侶になることを勧めたのです。

私は仏教について学び、瞑想しました。そして修行して僧侶になろうと決意したのです。残りの人生を他人(ひと)のために生きていこうと決め、すべての仕事を辞めて僧侶になりました。

修行はある無人島で始まりました。毎朝、漁船に乗せてもらって、近くの港まで運んでもらい、そこから6キロ離れた村に歩いて行って食べ物の寄進をうけて、また漁船で島に戻る4年間でした。

なぜタイで活動しようとした？

苦行の間、タイの人々が食べ物を与えてくれたおかげで生き延びることができました。自分自身が何であるのか、人生の意味を学びました。タイの若い人々を助けることで、恩返しをしていきたい。子どもたちに、だれか助けてくれる人がいるということ強く伝え、生きる意味を教えたいと思ったのです。私が与えてもなかった食べ物は大したものではなかったかもしれないけれど、それで生き延びることができました。小さな助けでも、大きな意味があります。それを実践していこうと決めて今の活動があります。

—ありがとうございます。



①ワットアルン・コミュニティー・ラーニング・センター教室入口 ②今年入学の奨学生が日タイの旗を振って出迎えてくれた ③同センターでタイ舞踊を習う地元の子どもたちが授与式で踊りを披露 ④昨年度の奨学生の東北タイの踊り ⑤看護助手として病院勤務の卒業生がフルーツカービングを披露 ⑥⑦⑧奨学生はセンターで、英語やコンピューターの他、フルーツカービングや料理、タイ舞踊などを学びタイ文化の素養を身につける ⑨地域の子どものための英語教室

